

国際文化研究科

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】（参考）

国際文化研究科の教員の多くは、学部と研究科、その他教学組織の運営を兼任で行っているのにも関わらず、研究科の改善に精力的に取り組んでいることがうかがえ、高く評価できる。学部との連携、博士後期課程のコースワークの充実のための「博士ワークショップ」開講、留学生のための「日本語論文演習」の開講、学位取得のためのガイドラインの明文化、専任教員による研究発表会、一般公開セミナーなど限られたリソースを最大限に生かした取り組みがなされてきた。

2019年度は研究科のブランディングが年度目標にも設定されており、教育内容の充実と共により多くの入学者を惹きつける研究科に発展することが期待される。同時に前年度に引き続き、事務作業の軽減化や効率化を実現するため、継続的な対応を期待したい。また、入学辞退者の低減や学部生に向けた情報発信の取り組みが始まっており、今後を期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

- ・総評の中で指摘があった、学部との連携に関して、「学部生による大学院科目の履修」制度を実現することができ、さらにいくつかの連携案が俎上に上がりつつある。
- ・専任教員による研究発表会、一般公開セミナーなど、盛況のうちに終了した。
- ・事務作業の軽減化・効率化に関しては、2020年度は猛威を振るっている新型コロナ対策等もあり、より一層の対策を講じていきたい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際文化研究科では、学部との連携については、2019年度から国際文化研究科設置科目の一部が学部3・4年生に専門科目として提供されており、高く評価できる。また、専任教員による研究発表会や一般公開セミナーなどは、研究活動および社会貢献活動として優れた取り組みである。事務作業の軽減化・効率化に関しては、大半の教員が学部、大学院、学部以外の教学組織の3つの教学組織に所属しリソースが限られている中、新型コロナウイルス感染症拡大への対応もあり、より一層の改善が期待される。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学位授与方針】

修士課程

■国際文化研究科は、所定の単位の修得及び修士論文（またはリサーチペーパー）により、以下に示す水準に達した学生に対して「修士（国際文化）」を授与する。

1. 「国際社会に存在する多様な地域文化間の相関関係」「多文化・多民族社会での共生」「様々なメディアが介在する情報化社会における文化交流・認識」の3つの研究領域の基盤的な知識と方法論を十分備えている。
2. 異文化間で生じる課題に対して、既存文献や先行事例を体系的に理解した上で批判的に評価し、公表に値する新たな視点を見出す独創性を有する。
3. 異文化間の理解や交流に関わる研究の知を現実の問題発見や実務的な問題解決に結びつけて実践知とすることができる。
4. 質的・量的調査を通して一次資料を発掘する能力を有し、分析結果を口頭表現や文章表現、あるいはICT等を活用して論理的に伝えることができる。

博士後期課程

■国際文化研究科は、所定の単位の修得及び博士論文により、以下に示す水準に達した学生に対して「博士（国際文化）」を授与する。

1. 「国際社会に存在する多様な地域文化間の相関関係」「多文化・多民族社会での共生」「様々なメディアが介在する情報化社会における文化交流・認識」の3つの研究領域の最先端の専門知識と方法論を十分備えている。
2. 異文化間で生じる課題に対して、外国語文献を含めた国内外の先行研究を体系的・網羅的に理解した上で批判的に評価

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

し、単著として公表するに値する独創的な研究成果を生み出す能力を有する。

3. 異文化間の理解や交流に関わる研究の知を現実の問題発見や実務的な問題解決に結びつけて実践知とすることの意義を認識した上で後進の指導・教育を行うことができる。

4. 独立した研究者として研究プロジェクトを企画・運営し、外国語（非母語）を使って構想から成果までのプロセスを的確に伝達するためのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を備えている。

【教育課程の編成・実施方針】

修士課程

■国際文化研究科は、研究科の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）達成のため下記のような教育課程を編成する。

1. 国際文化研究科で学ぶ3つの研究領域のうち「国際社会に存在する多様な地域文化間の相関関係」に関しては「異文化相関関係研究」科目群、「多文化・多民族社会での共生」に関しては「多文化共生研究」科目群、「様々なメディアが介在する情報化社会における文化交流・認識」に関しては「多文化情報空間研究」科目群として配置し、複数の科目群の履修を促す。

2. 先行文献の批判的レビューの力と独創的な着想力を養成するため、修士課程1年次の必修科目として国際文化研究を配置する。また、各科目群の中に文献講読と議論を中心にする科目を用意し、クリティカル・リーディングの能力を向上できるようにする。

3. 異文化間の理解や交流に関わる実務的な課題に取り組むことができる科目を複数用意し、シラバス等でそれを明示することで院生が選択しやすくする。

4. データ収集・分析方法、及び文章や口頭での発表については、必修の国際文化研究や国際文化共同研究、修士論文演習に加えて、毎年7月に開催する研究構想発表会、11月の中間発表会や国際文化情報学会での発表を課すことで能力を向上させる。また、母語以外の言語で発表するスキルを身につけるための日本語論文演習や英語による論文執筆・口頭発表科目を設定し、必要な院生には強く履修を奨励する。

5. 基盤学部の国際文化学部との連携を踏まえて、一定の条件を満たした学部生に研究科の授業の履修を認め、進学した場合には単位として認める。

博士後期課程

■国際文化研究科は、研究科の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）達成のため下記のような教育課程を編成する。

1. 研究科の3つの研究領域である「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の専門性を高めるため、博士論文演習以外に、研究科所属の全教員が参加しての「博士ワークショップ」を配置し、異なる領域からの学びを深める。

2. 外国語（母語以外で書かれた）文献を批判的に評価した上で研究成果を単著として発表できるよう博士論文演習を通して指導するほか、国内外の学術誌への投稿や海外での研究発表を強く奨励する。

3. 将来研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングの場として「博士ワークショップ」での他の院生へのコメントを課すと同時に、大学院所属の留学生に対するチューターを奨励する。研究内容・方法だけでなく、他の院生、とりわけ修士課程の院生が「実践知」の意義を自覚するような指導ができるようにする。

4. 独立した研究者として自立できるよう、共同研究への参画を促すなどして、研究プロジェクトの立案・運営能力を高める。

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。

S A B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

コースワークについては、「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の3つの専門科目群の複数の科目群から、修士論文の場合は30単位以上、リサーチペーパーの場合は34単位以上を取得する（修士論文とリサーチペーパーの最終的な選択時期は予備登録時）。また修士課程1年次には研究科の3つの研究分野の基本文献や研究方法を学ぶ「国際文化研究A/B」を、2年次には修士論文やリサーチペーパー執筆準備の「国際文化共同研究A/B」を必ず受講する。リサーチワークについては、修士学位論文提出年度に履修する、「修士論文演習A/B」で主指導教員による論文指導を受けるとともに、副指導教員から随時コメントや助言を求められるようになっている。また全専任教員が参加する7月と11月に開催される論文発表会においてコメントや助言を受ける体制を整えている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度より、修士1年次の春学期必修科目「国際文化研究A」に、修士論文・リサーチペーパーの執筆のための土台作りとして、「リサーチ・デザイン」（トピックの選び方、先行研究分析、リサーチ、タイム・マネージメント、等）、ならびに「研究のための基礎的な方法論」（言説（資料・史料）分析、フィールドワーク、統計調査、等を紹介）を導入した。

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・修士論文審査規程 ・リサーチペーパー審査規程 ・大学院履修案内 ・大学院講義概要（シラバス） 	
②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
【根拠資料】 ※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・大学院履修案内 ・大学院講義概要（シラバス） 	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・入試の可否判定に全教員が出席して入学後の留意点を共有している。 ・「博士ワークショップ」において、博士後期課程生が、修士2年次の必修科目「国際文化共同研究 A/B」修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーター役となり、さらにコメントについて文書でもフィードバックを行なうことで、研究者となった後の後進の指導・教育のトレーニングとして機能するようになっている。 ・さらに「博士ワークショップ」において、博士後期課程生は、具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会と中間発表会にて発表することが求められており、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得することが可能となっている。 ・必修科目の担当教員が研究の進捗状況等について懸念点等がある場合は、教授会に報告し共有している。 ・7月の構想発表会と11月の中間発表会に全教員が出席し、学生の研究発表に対する質疑やコメントを行っている。また発表会終了後に教員による評価会議を開催し、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有している。 	
【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2019年度入学者から「博士ワークショップ」に、以下の3段階のステップ制を導入し、順次性を持ったコースワークとリサーチワークの体系を導入した。 <ul style="list-style-type: none"> ・ステップ1：論文プロポーザル 「博士ワークショップ IA・B」 ・ステップ2：先行研究サーベイ報告書 「博士ワークショップ IIA・B」 ・ステップ3：博士論文を構成する章 「博士ワークショップ IIIA・B」 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン 	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 【修士】 「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の3つの領域の専門科目をほぼ均等に配置し、それぞれの科目を専門とする教員が担当することで、学生の側から見ると1つ1つの科目の専門知識だけでなく、それらをつなぐ学際的な思考を涵養できる編成になっている。 【博士】 「博士ワークショップ」で課されている研究発表において、「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の3つの領域の専門科目を担当する教員より、各教員の専門的知見からのコメントや助言を受けることができる。また「博士論文演習」において、博士課程における研究を進めるために必要な教育を提供している。さらに、副指導教員2名から必要に応じて随時指導や助言を受けられる体制を整えている。	
【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・ナンバリング一覧 ・国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン ・国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。	
<p>【修士】 アカデミックな英語力を養成する科目として「Thesis Writing A/B」と「Oral Presentation」を、アカデミックな日本語力養成のために修士1年次の留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 A/B」ならびに修士2年次の留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 C」を設置している。</p>	
<p>【博士】 海外での実地視察調査や学会発表、また外国語での論文執筆を推奨・指導している。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2019年度より修士2年次の留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 C」を開講している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーション資料 ・ 大学院講義概要（シラバス） 	
1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※履修指導の体制および方法を記入。	
<p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーションで教員が「教員紹介冊子」にもとづき自分の担当科目や指導可能領域を紹介するなどの履修指導を行っている。また、留学生には「国際文化研究日本語論文演習 A/B/C」、アカデミックな英語力を養成する科目として「Thesis Writing A/B」と「Oral Presentation」の履修勧奨を行っている。 ・ 各学期の最初の授業で履修予定者の関心を確認し、履修指導を行っている。 ・ 学生の自主的な研究会である「ひころく」の場で上級生が履修等に関する助言を行っている。 ・ 必修授業の場で担当教員が相談に基づき助言を行っている。 ・ 主指導教員（ならびに副指導教員）が履修指導を行っている。 	
<p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーションでコースワークやリサーチワークに関する履修指導を行っている。 ・ 各学期の最初の授業で履修予定者の関心を確認し、履修指導を行っている。 ・ 学生の自主的な研究会である「ひころく」の場で上級生が履修等に関する助言を行っている。 ・ 主指導教員（ならびに副指導教員）が履修指導を行っている。 	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2019年度オリエンテーションから、リメディアル教育の一環として首都大学院コンソーシアムの説明と利用勧奨を行なった。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーション資料 ・ 教員紹介冊子 	
②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。</p>	
<p>【修士】 「国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン」を、新入生オリエンテーション（本年度は代替周知法としてHPでの公開で対処）で配布し、研究指導計画の説明を行なっている。また同ガイドラインを研究科HPで公開している。</p>	
<p>【博士】 「国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン」を、新入生オリエンテーション（本年度は代替周知法としてHPでの公開で対処）で配布し、究指導計画の説明を行なっている。また同ガイドラインを研究科HPで公開している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。 ・ 国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン」</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

https://www.hosei.ac.jp/application/files/7415/7439/2416/2019_2_kokusaibunka_gakui-kenkyu_shusi.pdf

- ・「国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン」

https://www.hosei.ac.jp/application/files/5015/7439/2445/2019_2_kokusaibunka_gakui-kenkyu_hakase.pdf

③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。

はい いいえ

※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。

【修士】

- ・入試の合否判定に全教員が出席して入学後の留意点を共有している。
- ・修士1年次の必修科目「国際文化研究 A/B」では、国際文化研究に関する修士論文・リサーチペーパーを書き進めるための土台としてのリサーチ・デザインや研究の方法論について、専任教員と本研究科で博士課程を修了した兼任教員が指導にあたっている。
- ・修士2年次の必修科目「国際文化共同研究 A/B」では、各学生が研究の進捗状況や調査結果を発表し、専任教員ならびに本研究科で博士課程を修了した兼任教員がコメントや助言を行っている。また「博士ワークショップ」を履修している博士課程の学生が、各学生の発表に対してコメントを行うとともに、文書でもコメントのフィードバックを行っている。
- ・必修科目の担当教員が研究の進捗状況等について懸念点等がある場合は、教授会に報告し共有している。
- ・7月の構想発表会と11月の中間発表会に全教員が出席し、学生の研究発表に対する質疑やコメントを行っている。また発表会終了後に教員による評価会議を開催し、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員、副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有している。

【博士】

- ・入試の合否判定に全教員が出席して入学後の留意点を共有している。
- [2019年度以前の入学生]
- 全教員が出席する7月の構想発表会もしくは11月の中間発表会で研究発表を行い、教員は研究発表に対する質疑やコメントを行っている。また発表会終了後に教員による評価会議を開催し、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有している。
- [2019年度以降の入学生]
- 主指導教員・副指導教員が、「博士ワークショップ」の3つのステップごとの研究課題に関する指導を行うとともに、7月の構想発表会もしくは11月の中間発表会に全教員が出席し、学生の研究課題に関する発表に対して質疑やコメントを行う。また発表会終了後に教員による評価会議を開催し、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

後シラバス（学期終了後に、各教員が担当授業に関して、「曜日・時限・受講者数」「授業概要」「成果・達成度など」「設置科目の研究科全体での位置づけなどについての問題点・今後の課題などへのご意見」の項目を記入し提出することになっている）

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。

【修士】

- ・成績評価や単位認定に対して学生から問題が指摘された場合は教務委員会で対応する。
- ・修士論文及びリサーチペーパーの合否判定と評価については、主査と副査による評価が適切かどうかを専任教員全員で検討している。

【博士】

- ・成績評価や単位認定に対して学生から問題が指摘された場合は教務委員会で対応する。
- ・博士論文の合否判定は、公开发表会及び審査小委員会の結果をもとに教授会（審査委員会）で審議・承認している。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学位論文の審査規程

②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。

はい いいえ

※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【修士】 学位論文審査基準の名称：国際文化研究科修士論文規程・リサーチペーパー規程 明示方法：国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン	
【博士】 学位論文審査基準の名称：国際文化研究科博士論文規程 明示方法：国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン	
【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。 ・各学位論文の審査規程 ・国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン ・国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
※簡条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。 研究科執行部が大学院課よりこれまでの学位授与者のデータを入手し把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
※取り組み概要を記入。 【修士】 構想発表会および中間発表会での発表ならびに口述試験は、研究科の全専任教員が参加する場で行われ、それぞれの発表会、試験終了後に、全教員で個々の研究の水準をチェックしている。こうした専任教員全員による議論が学位の水準維持につながっている。 【博士】 構想発表会および中間発表会での発表は全専任教員が参加する場で行われ、発表会終了後に、全教員で個々の研究の水準をチェックしている。	
【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2019年度以降の博士課程入学生については、3段階のステップごとに設定された研究課題について主指導教員・副指導教員が達成度をチェックするとともに、この研究課題に関する発表を全教員で評価することで、学位のさらなる水準維持を図ることになっている。 （注：2019年度入学者がいないため、現状ではまだ実施されておりません）	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。 【修士】 修士論文ならびにリサーチペーパーの口述試験（論文提出者による主旨説明10分、主査からの試問15分、副査からの試問10分、その他の教員からの試問10分）後に、研究科の専任教員で判定会議を開催し、審査規程に照らして学修の成果を判断している。 【博士】 学位規則のとおり。	
【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。 キャリアセンターより過去3年度分のデータを入手し、教授会（第8回）において情報を共有した。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・2019年度第8回教授会資料	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。	
【修士】 <ul style="list-style-type: none"> ・研究科の3つの研究領域（「国際社会に存在する多様な地域文化間の相関関係」「多文化・多民族社会での共生」「様々なメディアが介在する情報化社会における文化交流・認識」）の基盤的な知識と方法論の修得については、修士1年次の必修科目「国際文化研究 A/B」ならびに修士2年次の必修科目「国際文化共同研究 A/B」において、各学生の成果を把握、評価している。 ・質的・量的調査を通して一次資料を発掘し、その分析結果を口頭表現や文章表現、あるいは ICT 等を活用して論理的に伝えることができる能力については、構想発表会ならびに中間発表会に全ての専任教員が参加し、学習成果を把握、評価している。 ・異文化間で生じる課題に対して、既存文献や先行事例を体系的に理解した上で批判的に評価する能力、ならびに異文化間の理解や交流に関わる研究の知を現実の問題発見や実務的な問題解決に結びつけて実践知とする能力の修得については、構想発表会ならびに中間発表会に全ての専任教員が参加し、異なる学問分野の知見から学際的に学習成果を把握、評価している。 ・上記に加え、修士論文やリサーチペーパーの口述試験後、研究科の専任教員で判定会議を開催し、審査規程に照らして学修の成果を判断している。 	
【博士】 <ul style="list-style-type: none"> ・研究科の3つの研究領域である「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の専門性を高めるため、「博士論文演習」に加え、研究科所属の全教員が参加しての「博士ワークショップ」を配置し、異なる領域からの学びを深めている。 ・外国語文献を批判的に評価した上で研究成果を単著として発表できるよう「博士論文演習」を通して指導するほか、国内外の学術誌への投稿や海外での研究発表を強く奨励している。 ・将来研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングの場として「博士ワークショップ」において、修士課程の学生の研究に対するコメントを課すと同時に、大学院所属の留学生に対するチューターを奨励している。 ・上記に加え、論文提出年次に、主指導教員と副指導教員が審査規程に沿って学習成果を評価し、その結果を教授会で審議している。 	
【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
特になし。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。	
【修士】 <p>1年次必修科目「国際文化研究 A/B」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究 A/B」において、研究科の3つの領域に関する知識と方法論の修得、また調査方法や論文技法を含めた学習成果について、担当教員が把握、評価している。また、構想発表会、中間発表会、口述試験のすべてに全教員が参加し、異なる学問分野から学際的に学習成果を把握、評価している。</p>	
【博士】 <p>論文構想発表会ならびに中間発表会に全教員が参加し、異なる学問分野から学際的に学習成果を把握している。</p>	
【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
2019年度以降の博士課程入学者については、以下の評価基準により、「博士ワークショップ」のステップごとの研究教育成果を把握、評価する。	
①平常点（コメント・シート）：20点（評価は研究科執行部が行う）	

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

②論文プロポーザル・先行研究サーベイ論文・博士論文を構成する章：80点（評価は発表会後の教員による意見交換会で行う） ・論文プロポーザル・先行研究サーベイ論文・博士論文を構成する章：40点 ・発表：40点 ①と②の合計点で成績評価を行ない、60点以上を合格とする（不合格の場合は再履修）。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・国際文化研究科博士後期課程ステップ制	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S A B
※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 【修士】 ・コースワークについては、学期ごとに後シラバスを教務委員会で検討し、その結果を教授会で議論している。 ・リサーチワークについては、構想発表会、中間発表会、国際文化情報学会といった発表の場を、時期を定めて設けることで、研究科全体として研究の進捗を確認し、次年度の科目の設定や必修科目の見直し等の検討につなげている。 【博士】 ・コースワークについては、「博士ワークショップ」における成果を、担当教員ならびに執行部で共有している。 ・リサーチワークについては、構想発表会、中間発表会、国際文化情報学会といった発表の場を、時期を定めて設けることで、研究科全体として研究の進捗を確認し、次年度の科目の設定や必修科目の見直し等の検討につなげている。 【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2019年度第2回教授会資料、第6回教授会資料（教務委員会の後シラバスへのコメント）	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S A B
※取り組みの概要を記入。 ・授業改善アンケートの結果を、2019年度第1回研究科教授会で共有し、改善すべき点があるかどうかの確認を行った。 ・必修科目の「国際文化研究 A/B」、「国際文化共同研究 A/B」の場で、担当する専任教員が学生の声を聞き、それを授業の改善に役立てている。 【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
〔修士〕 ・修士1年次に必修科目「国際文化研究 A/B」を履修することで、カリキュラム・ポリシーならびにディプロマ・ポリシーに掲げられている3つの研究領域に関する基盤的な知識や方法を修得できるようになっている。 ・春学期の構想発表会ならびに秋学期の中間発表会に全教員が参加し、学生の研究に関する進捗状況を把握するとともに、異なる研究分野の教員がアドバイスを行うことで、学際的な研究に発展させていけるようになっている。 ・口述試験に全教員が参加し、異なる研究分野から審査を行い、学際的な評価ができるようになっている。 〔博士〕	1.1①, ③ ; 1.2③ ; 1.4①, ② 1.5② 1.1①, ③ ; 1.2③, ; 1.3④ ; 1.4①, ② ; 1.5① 1.3④, ⑤ ; 1.4①, ②

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>・博士1年次から3年次に毎年「博士ワークショップ」を履修することで、博士論文の作成に向けたリサーチワークを進めていくだけでなく、将来教育者となるための能力を育成できるようになっている。</p> <p>・春学期の構想発表会ならびに秋学期の中間発表会に全教員が参加し、学生の研究に関する進捗状況を把握するとともに、異なる研究分野の教員がアドバイスをを行うことで、学際的な研究に発展させていけるようになっている。</p> <p>2019年度以降の入学生は「博士ワークショップ」を履修することで、段階的に博士論文の作成に向けたリサーチワークを進めていくことができるようになっている。</p>	<p>1.1③, ④ ; 1.2③ ; 1.4①, ③ ; 1.5① 1.1①, ③ ; 1.2③, ; 1.3④ ; 1.4①, ② ; 1.5① 1.1③, ④ ; 1.2③ ; 1.4①, ③ ; 1.5</p>
--	--

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・2019年度も入試で合格した志願者のうち、1名が、本研究科への入学を辞退し、他大学の大学院に入学した（修士1名、東京大学へ進学）。辞退者については、本人の意向もあり、必ずしも本研究科の魅力がないことが原因であるとは考えられないが、昨年来のブランディング強化を継続し、研究科の特色を発信していくことはもちろん、進学相談会の在り方などを再考したい</p>	1.1④

【この基準の大学評価】

<p>国際文化研究科では、教育課程の編成・実施方針に基づき、多くの点で改善が見られた。修士課程では、修士課程1年次に研究科の3つの研究領域に関する基盤的な知識や方法が獲得できる「国際文化研究 A/B」を、2年次には修士論文やリサーチペーパー執筆準備の「国際文化共同研究 A/B」を必ず受講することになっている。さらに修士論文・リサーチペーパーの執筆のための土台作りとして「リサーチ・デザイン」ならびに「研究のための基礎的な方法論」が2019年度「国際文化研究 A」に導入されており、コースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせて教育を行っており高く評価できる。学位の水準を保つための取り組みとして、修士課程では、構想発表会および中間発表会での発表ならびに口述試験は、研究科の全専任教員が参加する場で行われ、全教員で個々の研究の水準をチェックしている。こうした専任教員全員による議論が学位の水準維持につながっており評価できる。修士課程においてこのように全専任教員が構想発表会ならびに中間発表会に参加することは、異なる学問分野から学際的に学習成果を把握することにもつながっており評価できる。</p> <p>博士後期課程では、「博士ワークショップ」に3段階のステップ制を導入し、順次性を持ったコースワークとリサーチワークの体系を整備しており、大変優れた取り組みである。また、学位の水準を保つための取り組みとして、2019年度以降博士課程入学者については「博士ワークショップ」の3段階のステップごとに設定された研究課題について指導教員が達成度をチェックするだけでなく、研究課題に関する発表を全教員で評価する体制づくりは、評価できる。さらに、学習成果を把握・評価するための方法として2019年度以降の博士課程入学者については「博士ワークショップ」のステップごとに明確な成績評価基準を設定しており、優れた取り組みである。自己点検においてA評価の項目についても、前年度までの改善点を踏襲し、適切に行われている。問題点として2019年度入試における辞退者について挙げられているが、今後の研究科の魅力を発信する取り組みに期待したい。</p>
--

2 教員・教員組織

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S A B
<p>【FD活動を行なうための体制】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FD委員会 ・研究科執行部 <p>【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生オリエンテーションにおいて、研究科教員紹介冊子に基づき、各教員が専門分野ならびに担当科目の紹介を行った（新入生オリエンテーション：4月3日、大学院棟201教室、約50名）。 	

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>・後シラバスに基づいた議論を教授会の場で春学期・秋学期各1回行った（第2回研究科教授会、5月28日、BT19階D会議室、14名；第6回研究科教授会、10月8日、BT25階C会議室、15名）。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2019年度は研究科専任教員の研究発表会を2回開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興石哲哉「スコットランドにて英語を考える」、松本悟「今なぜ開発援助か—過去を学ぶ意義と今を見つめる眼差し」（7月23日、BT0300、約30名）。 ・和泉順子「エストニアの電子政府とeID、およびそれらが展開する社会生活の紹介」（12月10日、BT0300、約15名） 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究発表会レジュメ。 	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>基盤学部の国際文化学部とともに国際文化情報学会を構成する研究科として、学会費を使ったオープンセミナーを企画し、大学院生にも参加を推奨している。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「合評会 油井大三郎『平和を我らに一越境するベトナム反戦の声』（12月14日、外濠3F306） 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セミナーのレジュメ等 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・研究科の専任教員による研究発表会を開催している。この研究発表会には教員だけでなく大学院生も参加し、教員のFD活動の推進ならびに研究科全体の研究活動の活性化につながる取り組みとなっている。 ・後シラバスという試みは、他にあまり例を見ないが、事後に教育内容を振り返り気づきを得るよい機会となるだけでなく、改善点を考える上でも大きなヒントを与えてくれている。 	2.1①
	2.1①

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>研究科の教員は学部と兼任の状態にあり、基盤学部の国際文化学部の教員は学部以外の教学組織の運営にも関わることが多く、大学院を含めると3つの教学組織に所属している教員が大半である。その上、大学の情報教育、グローバル教育にも参画・推進の役割を担っている教員も多く、研究科の専任教員の研究やFD活動を活発化させていくのがなかなか難しい。事務作業の軽減や効率化を継続的に図っていく必要がある。</p>	2.1①, ②

【この基準の大学評価】

<p>国際文化研究科では、大半の教員が3つの教学組織に所属している中で、FD活動として研究発表会を2回開催しており、評価できる。また、後シラバスに基づいた議論を春学期と秋学期に各1回行い、教育内容を振り返り改善点を考える機会を設けており、研究科独自のFD活動として優れた取り組みである。さらに、国際文化情報学会を構成する研究科としてオープンセミナーを企画し、大学院生の参加を推奨しており、研究活動の活性化のための方策が講じられている。今後も、事務作業の軽減や効率化を継続的に行い、研究やFD活動のさらなる活発化が期待される。問題点として挙げられている事務作業の軽減や効率化については今後も継続的に取り組んでいく必要がある。</p>

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的
----	------	-------

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

1	中期目標	研究科の教育目標に掲げられている、マルチカルチュラルな人材育成とインターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の養成について、具体的な像ならびに養成の方法に関する議論を行う。	
	年度目標	養成を目指す人材像を検討するために、本研究科の入学者や受験者のニーズや進路希望を把握する。	
	達成指標	本研究科の入学者や受験者のニーズや進路希望を把握する方法について教授会で議論し、その方法に沿った形で調査を行い、結果について教授会で検討する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	第3回教授会（6月25日）で決定した方法と内容に基づき、大学院進学に関するアンケート調査（Google Form）を、国際文化学部3～4年生と国際文化研究科の留学生を対象に実施した（7月4日～22日）。87名の学部生と10名の大学院留学生から得られた回答結果を第4回教授会（7月23日開催）で報告した。また第6回教授会（10月8日開催）では、このアンケート結果の分析に基づきカリキュラム改革の方向性を議論した。
		改善策	一般入試や社会人入試で入ってくる学生のニーズや進路希望などについてはまだ把握ができていないことから、今後はこの部分に関しても把握する努力を行う。
質保証委員会による点検・評価			
所見	アンケートでは、国際機関での就職を念頭に修士号の取得や英語専修免許の取得を希望する回答があった。こうしたアンケート結果に基づき、具体的な改革の方向（本研究科への進学を前提とした学部の早期卒業制度や修士課程1年制の導入）を第10回教授会（20年2月25日）で打ち出しており、十分に評価できる。		
改善のための提言	修了者の進路状況を引き続き追跡し、改革の進捗状況に伴う進路先の変化を把握するように努めることが肝要である。		
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	教員の教育能力の向上の取り組みの一環として、教員の研究活動の促進を図る。	
	年度目標	研究科の専任教員の研究発表会を、国際文化情報学会に所属する教員と学生が参加するFICオープンセミナーとして実施する。	
	達成指標	FICオープンセミナーとして研究科の専任教員の研究発表会を2回以上開催する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	FICオープンセミナーとして、7月23日に2名、12月10日に1名の教員研究発表会を実施した。
		改善策	教員の教育・研究能力のさらなる向上のために、論文原稿の講評会などを検討する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	2018年度から始まった教員の研究発表会は、FICオープンセミナーとして定着しつつあり、所期の年度目標を達成している。		
改善のための提言	研究能力の向上をどのように教育能力（深い内容を平易に伝える力）の向上に繋げていくのが課題。教員の発表に対する学生や他の教員のリアクションペーパー（コメント、アドバイス）を設けるなどの工夫がある。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	学生のニーズに即した学部・大学院の相互連携を、基盤学部である国際文化学部と協力しながら推進する。	
	年度目標	今年度から導入されている「学部生による大学院科目履修」制度への学生の関心を促すとともに、学部生の受講状況を確認し、必要に応じて対策を検討する。	
	達成指標	●学部生に授業内容がわかりやすいよう、大学院の授業科目の一部にサブタイトルをつけシラバスにも反映されるようにする。 ●学部生の受講状況を教授会で共有し、必要に応じて対策を議論する。	
	年度末	教授会執行部による点検・評価	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	報告	自己評価	S
		理由	●必修と言語関連科目を除くすべての大学院科目にサブタイトルをつけ、2020年度よりシラバスに反映されるようにした。 ●教授会において、学部生の受講状況を報告するとともに、後シラバスでの指摘された問題点（学部生と院生の基礎知識のギャップ等）を議論した。また、春学期の履修登録時に生じた混乱への対応策として、秋学期からは学部事務課が作成した Google Form で履修登録を行った。
		改善策	学部生の大学院科目の履修をさらに促していくため、2年次3月の演習説明会などの機会において大学院科目の履修制度の説明を行なう。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	懸案であった学部と大学院の連携の実現に、一歩大きく前進した試みであり、スタート時の混乱にも迅速に対応しており、充分評価に値する。
		改善のための提言	この制度が学部生にとって実のあるものにしていくために、すでに研究科としては承認された修士一年制を前提とした先取履修、本研究科への進学を前提とする早期卒業制度の導入に向けて、学部執行部との協議を積極的に推進していくことが必要である。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
4	年度末報告	中期目標	①修士論文やリサーチペーパーの研究を進めていく上で必要な基本的な知識・概念・方法論を身につけていない学生を対象とするリメディアル教育方法の策定を行う。 ②修士課程1年次必修科目「国際文化研究」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究」の効果的な実施をさらに促進する。
		年度目標	①リメディアル教育の一環として、首都圏大学院コンソーシアムの利用を推奨する。 ②修士論文・リサーチペーパー作成に向けた土台作りを目的に、「国際文化研究A」においてリサーチ・デザインや研究のための基礎的な方法論の紹介を行う。
		達成指標	①新入生オリエンテーションにおいて、首都圏大学院コンソーシアムの紹介を行い、修士論文やリサーチ・ペーパーの研究に必要な知識・概念・方法論を身につけられるよう指導する。 ②「国際文化研究A」において、リサーチ・デザイン（トピックの選び方、先行研究分析、リサーチ、タイム・マネージメント、等を含む）や研究のための基礎的な方法論（言説（資料・史料）分析、フィールドワーク、統計調査、等）の紹介を行う。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	①研究科のすべての院生が集まる新入生オリエンテーションにおいて、修士論文やリサーチ・ペーパーの研究のために、首都圏大学院コンソーシアムを積極的に活用するよう指導を行った。 ②M1必修科目の「国際文化研究A」において、リサーチ・デザインや研究のための基礎的な方法論の紹介を、複数の研究科教員による輪講の形で実施した。
		改善策	リメディアル教育については、首都圏大学院コンソーシアムの活用を引き続き推奨するとともに、他の方法についても検討を行う。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	達成目標①、②とも実現している。特に②については、「国際文化研究A」の授業内容がM1春学期に習得すべき内容に非常に合致しており、今後この科目のモデルになるものといえる。
		改善のための提言	リメディアル教育については、他大学院開設科目だけでなく、基盤学部の開設科目の有効利用も視野に入れて、その実現に向けて工夫していくことが考えられる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
5	中期目標	①リサーチ・ペーパーの内容をより明確化し、リサーチ・ペーパーの教育効果の実質化を図る。	

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		②研究の主たる対象の調査や分析において必要な外国語（母語以外）の運用能力の育成を図る。
	年度目標	①リサーチペーパーの内容をより明確化したことで、学生の研究動向にどのような影響があるか追跡調査を行う。また、「研究サーベイ論文」もしくは「提言論文」を選択した学生に対するサポートを行う。 ②国際文化学部外国語アプリケーション科目（上級レベル）の履修に向けた検討を行う。
	達成指標	①リサーチペーパーを選択した学生については、指導教員と学生の双方に、選択の理由等についてヒアリングを行う。また、リサーチペーパー（「研究サーベイ論文」もしくは「提言論文」）を選択した学生に対して、リサーチペーパーの主旨と概要に沿った形で研究が進められるよう、主指導教員・副指導教員を中心にサポートを行う。 ②教授会において外国語の運用能力の育成に関する議論を行うとともに、学部アプリケーション科目の履修に関して、学部執行部と意見交換を行う。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	①今年度はリサーチ・ペーパーを選択した学生による論文の提出はなかったが、来年度9月修了を予定している学生に対し、必修科目や構想・中間発表会などを通じて、「研究サーベイ論文」もしくは「提言論文」の趣旨と概要に沿った形で研究を進められるようサポートを行った。 ②第9回（1月21日）ならびに第10回（2月25日）教授会において、外国語の運用能力の育成を目的に、学部アプリケーション科目の履修に関する議論を行い、学部執行部に提案を行った。
	改善策	リサーチペーパーを選択した学生に対して、選択の理由等についてヒアリングを行い、リサーチ・ペーパーの教育効果の実質化を図る。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	達成目標①、②とも着実に進められている。
	改善のための提言	①リサーチペーパー（提言型）を選択した学生については、外部の専門家のアドバイスを受けたり、学外の関連する学会、研究会での発表を推奨するなどして、提言内容がより現実に即した質の高いものになるような工夫を検討していくことが考えられる。リサーチペーパー（研究サーベイ型）を選択した学生については、当該分野の網羅的な知識と的確な視野を得るために、指導教員のもとで順次性を持たせた課題計画を立てるなどの工夫の検討が考えられる。 ②については関連分野の原著論文の多読精読が効果的と考えられる。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	①基盤学部である国際文化学部からの進学者の増加を図る。 ②博士課程への進学者の増加を図る。
	年度目標	①学部生に大学院での学びや開講科目について関心を持ってもらうよう、情報提供の機会を増やす。 ②教員の研究活動とリンクする形で、研究科の特色や独自性を打ち出すブランディングの検討を行う。
	達成指標	①国際文化学部 Web ページに大学院科目の履修案内を掲載する。また、学部生のための大学院授業参観ウィークを開催する。 ②教授会において議論を行う。また、研究科のブランディングにつながるテーマで勉強会を行ったり、公開セミナーを開催する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
自己評価		A
	理由	①学部生の大学院科目履修勸奨の一環として、4月と9月に国際文化学部 Web ページに大学院科目の履修案内を掲載してもらった。また秋学期第1週に大学院授業参観ウィークを実施した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			②合評会 油井大三郎『平和を我らに一越境するベトナム反戦の声』（12月14日開催）、パプアにおける土地利用権とアブラヤシ農園開発（1月15日開催）の2件の公開セミナーを実施した。
	改善策		セミナー等の開催に加え、学部生の大学院への関心を高める機会の多様化を図る。
		質保証委員会による点検・評価	
	所見		学部生に本研究科の情報を的確に提供するという意味で、達成目標①、②が実施されたことは評価できる。
	改善のための提言		本研究科に関心を持った学部生をいかに認識し、進路の選択肢に本研究科を入れてもらえるようにするのか、学部と連携しながら検討していく。
No	評価基準	教員・教員組織	
7	中期目標	大学院を担当している教員の退任にあたっては、専任教員の新規採用を行う基盤学部の国際文化学部に変更を申し入れ、国際文化研究科側のニーズが反映された採用を図る。	
	年度目標	後任人事において、研究科のニーズが反映された採用を図る。	
	達成指標	教授会において、後任人事に関する研究科のニーズを議論し、その内容を新規採用を行う国際文化学部に変更を申し入れる。	
		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S	
	理由	第1回教授会（4月23日）において、後任人事に関する議論を行い、国際文化学部に変更を申し入れた。研究科の要望が盛り込まれた公募内容に基づき新任教員の採用が行われた。	
	改善策	来年度に予定されている後任人事においても、研究科のニーズが反映された採用を図る。	
年度末報告		質保証委員会による点検・評価	
	所見	これも学部と研究科との連携の一環と捉えることができ、教員採用の望ましい形と言え、評価できる。	
	改善のための提言	研究科の担当教員の採用にあたっては、学生の需要動向も踏まえつつ、基盤学部の現有勢力の中から選出することも念頭に置く必要がある。	
No	評価基準	学生支援	
8	中期目標	外国人留学生に対する修学支援をさらに推進する。	
	年度目標	修士課程を通じた、留学生に対する日本語支援体制が有効に機能しているか検証を行う。	
	達成指標	「国際文化研究日本語論文演習 A/B/C」の履修状況ならびに日本語相談室や日本語チューターの利用状況等から、留学生に対する日本語支援体制が機能しているか、教授会で検証する。	
		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A	
	理由	2年次の留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 C」が新設されたことに伴い、春学期の日本語科目の履修状況について、担当教員による報告書を研究科 ML で共有した（7月27日）。また、第6回教授会（10月8日）において、日本語科目の後シラバスに基づき履修状況の確認を行った。さらに、2年次必修科目において日本語相談室や日本語チューターを積極的に利用するよう指導を行った。	
	改善策	日本語チューターについては、指導側が不足する状況が続いており、指導を受ける側と指導する側の数のバランスについて引き続き改善を試みる。	
年度末報告		質保証委員会による点検・評価	
	所見	修士論文を本格的に執筆し始める M2 春学期に「国際文化研究日本語論文演習 C」を開設できたことは大きな改善になった。受講生からの反応も上々である。	
	改善のための提言	M2 の留学生には単位の取得状況に関係なく、「国際文化研究日本語論文演習 C」を履修するよう、新学期のオリエンテーションなどの機会に指導する。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
9	中期目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った社会貢献・社会連携の実施に向けた取り組みを図る。	
	年度目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った一般公開セミナーを開催する。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	達成指標	一般公開セミナーを1回は開催する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	一般公開セミナーとして、合評会 油井大三郎『平和を我らに一越境するベトナム反戦の声』（12月14日開催）と、パプアにおける土地利用権とアブラヤシ農園開発（1月15日開催）を実施した。
	改善策	一般公開セミナーは比較的規模の大きな企画となることから、年度当初から企画・準備を進めるようにする。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	研究科の対外情報発信という意味で、たいへん評価できる。
	改善のための提言	社会のニーズに応えられる企画を研究科内で検討する。3年ぐらいを単位に複数候補を挙げておき、早い段階から企画の検討を行えるようにする。
【重点目標】		
博士課程への進学者の増加を図ることを重点目標とする。現段階では直接的かつ即効性のある対策は見当たらないが、今年度は研究科の特色あるブランディングを策定していくための作業を行う。具体的には、FIC オープンセミナーとして教員の研究発表会の開催、ブランディングにつながるテーマに関する勉強会の実施、研究科の特色を活かした一般公開セミナーの開催を行う。		
【年度目標達成状況総括】		
重点目標として掲げた博士課程への進学者の増加については、基盤学部である国際文化学部からの進学者を増加していくための方法を精力的に検討した。具体的には、7月に実施した学生アンケート調査に基づき、学部と大学院の連携の強化を図るカリキュラム改革に向けた議論を教授会で行った。その結果として、新たなカリキュラム改革の概要と方向性が見える状況になった。他項目についても、学部との共同で教員研究発表会（3回）や一般公開セミナー（2回）を実施した。他、学部生による大学院科目の履修制度や、留学生2年次の日本語科目を新たに導入し、中期目標の達成に向けて着実な作業を進めることができた。		

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

国際文化研究科では、2019年度目標の達成状況については9項目中6項目の目標を達成できている。重点目標として掲げた「博士課程への進学者の増加」については、学生アンケート調査に基づき、国際文化学部との連携強化を図る新たなカリキュラム改革に向けた議論を教授会で行い、その概要と方向性が見える状況になった点は評価できる。その他の項目についても、学部と共同での研究発表会や一般公開セミナーの実施、学部生による大学院科目の履修制度の導入など、中期目標の達成に向けて着実な作業を進めており、さらなる成果に期待したい。
--

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	研究科の教育目標に掲げられている、マルチカルチュラルな人材育成とインターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の養成について、具体的な像ならびに養成の方法に関する議論を行う。
	年度目標	研究科教授会などで、ことあるごとに議論を重ね、どのような人物を理想とするか、どのようにすればそのような人物が養成できるか、意見を交換し、情報を共有する。
	達成指標	教員各自が、マルチカルチュラルな人材、インターカルチュラルに活躍する高度職業人や研究者とは具体的にどのような人物なのか実例を挙げ、教員紹介冊子で、その人物を選んだ理由とともに学生や教員と情報共有し、併せて年度末を目途にweb上で公開する。（場合によっては、別途冊子の作成も視野に入れる。）
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	教員の教育能力の向上の取り組みの一環として、教員の研究活動の促進を図る。
	年度目標	基盤学部と共に実施する国際文化情報学会の行事であるFICオープンセミナーというかたちで、研究科所属の専任教員の研究発表会を複数回開催する。
	達成指標	FICオープンセミナーを最低2回開催する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学生のニーズに即した学部・大学院の相互連携を、基盤学部である国際文化学部と協力しながら推進する。
	年度目標	可能な相互連携について、2019年度に国際文化研究科における修士1年制の導入や学部外国語科目の大学院生受講を求めていく提案があり、それを推進することが認められたが、それらについて現実的な条件等を考えながら推進していく。
	達成指標	具体的な提案内容について、その実現に向けた議論を開始する・
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	①修士論文やリサーチペーパーの研究を進めていく上で必要な基本的な知識・概念・方法論を身につけていない学生を対象とするリメディアル教育方法の策定を行う。 ②修士課程1年次必修科目「国際文化研究」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究」の効果的な実施をさらに促進する。
	年度目標	①基本的な知識・概念・方法論を身につけてもらう足がかりとして、本研究科の3研究領域での基本的な知識・概念・方法論の洗い出しを行う。 ②必修科目の担当者に必修科目がより効果的に実施されるための問題点等の洗い出しを行う。
	達成指標	①学生に足りない知識を補ってもらうべく、各科目担当者による知識・概念・方法論を身につけるための基礎的な文献リストを年度内に作成する。 ②必修科目の担当者から問題点について、執行部がヒアリングを行い、より効果的な実施を目指すべく、年度内に教授会で情報を共有する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	①リサーチ・ペーパーの内容をより明確化し、リサーチ・ペーパーの教育効果の実質化を図る。 ②研究の主たる対象の調査や分析において必要な外国語（母語以外）の運用能力の育成を図る。
	年度目標	①リサーチペーパーを選択した学生の追跡調査を行う。 ②留学生については、調査・分析に苦がなく、発表が不自然にならないレベルの日本語能力が身につくようにする。 ③日本人学生については、基盤学部の外国語アプリケーション科目の履修に向けた検討を継続して行う。
	達成指標	①リサーチペーパーの教育効果を知るために、選択した学生と指導教員双方に、年度内にヒアリングを行う。 ②留学生については、発表会等で指導教員以外の教員と日本語能力について情報共有を行い、年度目標に達するのに必要な指導・助言を与える。 ③日本人学生については、基盤学部執行部と連携を密にとり、年度内に目標の実現について何らかの結論を出す。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	①基盤学部である国際文化学部からの進学者の増加を図る。 ②博士課程への進学者の増加を図る。
	年度目標	①研究科側からの情報提供をしっかりと行い、研究科の魅力をしっかりとアピールするべく、進学相談会の在り方等を変える。 ②博士課程への進学者の増加を図るべく、進学相談会の見直しを図る。
	達成指標	①進学相談会の回数を増やすことを考えたり、内容に差異化を図る。 ②進学相談会の中で、博士課程進学者に焦点を当てた部分を設け、本研究科の魅力を伝える。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	大学院を担当している教員の退任にあたっては、専任教員の新規採用を行う基盤学部の国際文化学部要望を申し入れ、国際文化研究科側のニーズが反映された採用を図る。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	後任の人事について、大学院として要望をはっきり示し、それが反映された採用の実現を図る。
	達成指標	教授会で議論の上、人事に関する申し入れ書として基盤学部に申し入れを行う。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	外国人留学生に対する修学支援をさらに推進する。
	年度目標	主に修士課程の留学生に対して、既存の日本語支援体制、チューター制度などの効果の検証を行う。
	達成指標	執行部が年度を通じて留学生、日本語指導科目担当等教員、日本語チューターなどに対してヒアリングを行い、それを教授会で情報共有する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った社会貢献・社会連携の実施に向けた取り組みを図る。
	年度目標	本研究科の理念・目的に沿った一般公開のFICオープンセミナーの実施を企画する。
	達成指標	一般公開のFICオープンセミナーを最低1回開催する。
<p>【重点目標】 本年度は理念・目的について重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <ul style="list-style-type: none"> 重点目標について研究科教授会などで議論し、可能な限り教授会内で情報共有する。 一読しただけでは晦渋に思えてしまうHPでの本研究科の「見え方」について、改善を図るなどして、理念・目的の可視化を図る。 		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

国際文化研究科では、2020年度の中期目標、年度目標ともに現状分析を踏まえており、概ね適切かつ具体的に設定されている。ただ、新型コロナウイルス感染症の拡大という事態を受けて、「内部質保証」と「社会貢献・社会連携」の達成目標として掲げられている「FICオープンセミナー」や、「学生の受け入れ」の達成目標で言及されている「進学説明会」は、従来の形式での実施は困難であることが予想されるので、Zoom等を用いたオンラインでの開催など、より具体的な達成目標の検討や実施方策が望まれる。

【大学評価総評】

国際文化研究科では、2019年度は「教育課程・学習成果の評価」で多くの改善が見られた。修士課程と博士後期課程のどちらにおいても、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせて教育を行う施策が実施されており、高く評価できる。大半の教員が3つの教学組織に所属している中で、研究発表会やオープンセミナーを実施しており、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化のための方策として評価できる。また、後シラバスに基づいた議論の実施は、研究科独自のFD活動として優れた取り組みである。

2019年度目標は9項目中6項目を達成し、中期目標に向けた改善策も示されている。2020年度目標は概ね適切に設定されているが、新型コロナウイルス感染症の拡大という事態を受けて、より具体的な対応策の検討が望まれる。

今後も、研究科のブランディング強化を継続し、研究科の特色を発信する取り組みによって、より多くの入学者を惹きつける研究科に発展することが期待される。また、事務作業の軽減や効率化を継続的にを行い、研究やFD活動のさらなる活発化を期待したい。

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。